

想像界の生物相

ティンガティンガの妖怪

和田 正平 わだ しょうへい
民博 名誉教授



資料名 | 絵画 (ティンガティンガ)
「ワニと妖怪」

標本番号 | H0170739

制作 | ハッサニ、1989年

地域 | タンザニア

サイズ | 縦 67cm × 横 67cm



資料名 | 絵画 (ティンガティンガ)
「鬼蛇姿の妖怪」

標本番号 | H0170790

制作 | ムクーラ、1989年

地域 | タンザニア

サイズ | 縦 67cm × 横 68cm

タンザニアのポップアート「ティンガティンガ」は、近年、日本でも目にする事が多くなった。思い起こすと、一九六〇年代、タンザニア南部マクア人から突如広がったポップアートが、日本でも一般に知られるようになったのは、白石頭二、山本富美子の絵画本『ティンガティンガ』(講談社、一九九〇年)からで、動物、鳥、生活、マジシャンのジャンル別に二四六点が紹介された。その後、中心作家であったジャフアリー・アウシ等を「色彩の魔術師」として大きく取り上げた『ティンガティンガII』(講談社、一九九二年)が八八点のアートを紹介し、彼らは日本でも人気作家になった。同じころ、民博でも、ティンガティンガ二〇三点を収集した。

ポップアートとは、一九六〇年代に、アメリカから広がった大衆文化をテーマとした芸術を指すことばである。アメリカの芸術運動としてのポップアートにおいて、アーネスト・ウオーホルなどの個人の作家がブランド化されたのに対して、ティンガティンガは誰もが助け合って作品を描いていて、作家個人名にはあまりこだわらない。つまりティンガティンガの場合は、大衆芸術という意味で、ポップアートとよばれる。

◆◆◆ミステリアスな世界◆◆◆
民博でも、開館二〇周年(一九九七)九

八年)に合わせて、アフリカのポップアート「サバンナの現代絵画 ティンガティンガの不思議な世界」を講堂ホワイエで展示した(七三三三)。観覧者の人気が集まったのは動物画のジャンルで、象、ライオン、シマウマ、鳥(フランシゴ)をモチーフとして描いたもので、創始者のエドゥワジ・ティンガティンガ(一九三二〜七二年)の伝統に沿った作品であった。

しかしタンザニアでは、スワヒリ語で「シエタニ」という精霊や化け物が出現する昔話の世界を描く作品も確実に増えていった。その発端となったのがタンザニアを代表する芸術家、ジョージ・リランガ(一九三四〜二〇〇五年)の絵画である。彼は民話に基づいた「シエタニ」に想像力をふくらませ、まるで人間みたいに生活しているが、人間にはありえないさまざまなミステリアスな姿を描いたのである。ティンガティンガ派からも、その発想をみならべて「シエタニ」を描くものが出てきたのである。右に掲げた「ワニと妖怪」と名付けたアートは、ワニといっても、尻尾に子どもの妖怪の頭がついている。妖怪は男で、頭から左右に角がのびていて、その先にも顔があり、また背中には羽根がついている。どうしてこんな発想が出てくるのだろうか。

もう一枚は、妖怪が出現したので、三

人の女性が逃げようとするが、そのうち二人はそれぞれ首をつかまれている。妖怪の頭には角があり、口を大きく開いて舌なめずりをしている。それだけではない。開いた股間から陰茎が蛇となつて立ち上がっている。どこかユーモラスな化け物である。これは、日本でいえば、動物たちの遊びを擬人化し、滑稽に描く「鳥獣人物戯画」に一脉通ずるものがある。現代では水木しげるのマンガ『ゲゲゲの鬼太郎』の世界のアフリカ版ともいえそうだ。

◆◆◆大衆芸術に生きる妖怪◆◆◆

ただ、タンザニアは貧しい国で、基本的に安い六色のエナメルペイントと天井用のボード(裏面に布)を利用して作品を制作していた。観光客相手に路上で売ることから始まったので、現在でも、巧拙を無視して、ティンガティンガ派の絵を描いて生計を立てる人が後を絶たない。

ゆえに、ティンガティンガ工房に弟子入りする若者が多い。日本からも一年間、身をもってこの画法を学ぶために渡航し、帰国後、関西を中心にティンガティンガアーティストとして活躍する人も出てきた。今までは、動物植物ものが主だったが、いつか妖怪画にも手をのばすかもしれない。